

不活化ポリオワクチン接種について

【ポリオワクチンの必要性】

急性灰白髄炎（ポリオ）は、脊髄性小児麻痺ともよばれ、日本では自然流行はなくなりましたが、世界では流行しているところがあります。ポリオに感染した場合には治療薬がないため、唯一の対処方法は「予防」になります。そのため、世界中の国でポリオワクチンが接種されています。

【ポリオワクチンの種類】

ポリオワクチンには経口生ワクチン（OPV）と不活化ポリオワクチン（IPV）があります。現在の日本で定期接種になっているのは経口生ワクチン（OPV）です。

【ポリオ経口生ワクチンの問題点】

経口生ワクチンはウイルスの毒性を弱めたものを使用しているため、ワクチン接種によってポリオに感染する確率が200万接種から486万接種に1回とされています。また、ワクチン接種した人からワクチンを接種していない人への感染はその1/2から1/10とされています。そのため、ワクチンによる感染を防ぐために、日本と北朝鮮を除く東南アジア諸国やアメリカ、ヨーロッパでは以前から不活化ポリオワクチンになっています。

【当院が不活化ワクチンを行う理由】

来年には日本でも不活化ワクチンが承認される予定であり、必ず不活化ワクチンに切りかわることでしょう。しかし、それがいつか明らかではないために、不活化ワクチン接種を待っている間に抗体をもたない子どもたちが増えてくるのが心配です。そこで、現在の経口生ワクチン接種が心配な方のために、当院でも不活化ワクチンを輸入して接種することにしました。

【不活化ワクチンのスケジュール】

◇生ワクチンを1回も接種していない場合

- 1回目：生後2カ月から
- 2回目：1回目から4～8週後
- 3回目：2回目から6カ月から1年半後
- 4回目：4～6歳時

◇生ワクチンを1回接種している場合

- 1回目：生ワクチン接種から8週間後
- 2回目：1回目から4～8週後
- 3回目：4～6歳時（生ワクチンと合計4回）

【不活化ワクチンの注意点】

ワクチン接種による副反応によって重い健康被害が生じた場合には、輸入商社の「輸入ワクチン副作用被害救済制度」による補償を受けることができますが、国で承認されていない自費ワクチンで補償制度もないに等しいとご理解ください。

◇不活化ポリオワクチン予防接種は、完全予約制でしたが予約なしで接種できるようになりました。

